

昭和二十七年五月廿三日第三種郵便認可(毎月一回一日發行)
昭和二十七年四月廿五日印刷
昭和二十七年十一月一日發行

第十八卷 第十一號

浄土

十二月號

大乘の歩み 眞野正順

勤勞の苦痛を
尊敬しあいませう 小笠原秀實

雉子のこゑ 吉田絃二郎

小説 吉水 東山未知夫

佛舍利

佛教徒會議華かな彼岸の頃のこと。參詣に來た一人の青年から訊かれた。

「今度、日本にお釋迦様のお骨が來たそうですが、本物なんですかね」

私は言下に答えた。

「むろん本物ですよ。だから尊いんですよ」

その若人は、だが腑に落ちぬ顔をして

「へえー本物ですか。そうですかねえ」

と首をかしげていた。

私も、その疑問を解くだけの理窟は知っている。又、何とかいいくるめてしまうことも出来る。然し、何としても、そうするには私自身はつきりとしていなかった。

彼が歸つた後で、しみじみと考えてみた。そして色々に惑つた結果、自分がとつた態度を正しいと判斷することが出來た。生じつかなことを言つたとて、その青年には反つて疑問が増す丈けだつたらうし、又、私自身も青年と同じ疑いに引き込まれてしまふだらう。尋ねるからには半信半疑だつたのだから、その何れかに決めてやることが必要なので、要は、本物かにせ物かということではなく、その人の心を一方に割り切つてやることだ。

只、惜しむらくは、私の答えには、自ら信じた上での重みがなかつたことだ。だから青年は首をかしげたのであらう。(竹中)

淨土十一月號 目次

雉子のこゑ……………吉田絃二郎(1)

大乘の歩み……………眞野正順(4)

勤勞の苦痛を
尊敬しあいましせう……………小笠原秀實(12)

佛典 阿彌陀經の話……………藤井實應(20)

善 と 惡……………山田鏡瑞(17)

名士 世界の平和は(伊藤述史)……………佐藤賢順(24)

訪問……………

佛心開眼……………藤田寛海(9)

映畫 大佛開眼……………(11)

上味 増……………高瀬磯(8)

ルポ 淨土の集ひ……………松庵寺(16)

趣味のページ 現代の和歌……………(3)

ブックレビュー 現代文學と佛教……………折原教詮(26)

小説 吉 水……………東山未知夫(29)

挿畫……………松濤達文

芝園だより



雉子のこゑ

吉田 絃二郎

山の秋も深まつて行き、そここの留守になつた別荘の清掃をたゞ獨りでやつてゐる老人がある。雨嵐の日もかれはほとんど無關心の體で桶をかついでは、山坂を黙々として上り下りしてゐる。

「若い者はかういふ仕事はきらいますで、わしが一人でやりますだ」かれは笑ひながらいつた。

「戦時中でした。浅間山が爆發して、恰度その時登山してゐた栃木縣の青年がやられ、擔荷ではこばれて來ましたが、郷里から引き取りに來るまでは、こつちの旅館であづかることになりましたが、熔岩でやられた姿といふものは、とてもあさまじうて、見られたものじやありません。それで誰れも死骸に近づかうとする者がをりませ

ぬ。それかて佛さま一人で置くのも可哀想じやから、わしが一人でお通夜をして、夜が明けるまでお線香は絶やしませんでした。それでも翌朝になつて、朝飯を食ふ段になつた時はすこし胸が悪かつたぞ」とかれは笑ひながら語つたこともあつた。

わたくしは飄々乎たるかれの風貌から見て、時々、寒山拾得といふ人たちにもこんなところがあつたのではないかと想ふことがある。

かれは寒山のやうに詩は作らない。しかし詩の心がなideではない。誰彼れの短尺をもらつてはよろこんでゐる。

或る日わたくしは山莊を出て、坂を下つて散歩に出か

けた。

坂は急であつた。わたくしは坂の中ほどに休んでゐた。ところで例の老人に出會つた。老人はわたくしが山莊へ歸るところだと早合點したもののらしく、やにわにわたくしの腕をつかんで

「この坂は上るのは難儀でしょう。わしが連れてつてあげますよ」といつて、今下つて來たばかりの坂道を山莊の方へ引きずつてゆくのであつた。そこでわたくしは

「わたしはこれから坂を下りて散歩に行くのだよ」と説明したがかれは名代のカナツンボなので、わたくしの意が通じない。かれはわたくしが聲を大きくして説明すれば説明するほど、ひとり合點して大きな聲で笑ひながらわたくしを山莊の方へ引き上げてゆくのであつた。わたくしはたうとう山莊へ連れもどされてしまつた。

かれは山莊の縁端に坐つて三十分ばかり愉快さうに話し込んで、山を下つて行つた。

わたくしはその日の散歩をやめにしてしまつたが、いさゝかも不愉快ではなかつた。ほゝ笑ましくさへなつた。すべての人間の行爲を佛さまの眼で見られたら、この老人に似たことを、わたくしたちもやつてゐるのであら

う。

山莊の周圍にはこのごろ八九羽の子をつれた雉子が來て餌をあさつてゐる。

子が母雉子からはなれて餌をあさると、母雉子はかなしい聲で子と呼ぶ。

今日は山莊の近くに遊んでゐる雉子の一家にとつて悲しい日であつた。

山莊の横の胡桃の木の上で枝を折るやうなはげしいものの音がするので、ふと、のぞいて見たら、大きな鷲が雉子の子を捕へてゐるのであつた。

こんな静かな山の中に來てまであさましい姿を見なければならぬかと思ふと暗いこゝろにならざるを得ない。夜は月が眞晝のやうに照つてゐた。今夜は仲秋の名月である。

わたくしは寝たが、大鷲をつかまれた雉子の子の姿が眼からはなれない。

直夜中ごろわたくしは雉子の聲を聞いた。

晝間子を奪はれた母雉子の聲であらう。腸を斷つやうな雉子の聲が二三度つゞいた。

名月や子をうばはれし雉子のこゑ

の短歌現代をどう解釋するかによつてその内容はかわつてくるだろうが一應本回は最近一年間のものを材料とした。一年間の歌誌を丁寧に見てゆけば歌壇に對する回顧と反省になるわけでもあるが、それをここでにわかにな云えるものではない。ただ次の事はどの短歌雑誌をひらいてみても云える事だろう。即ち

(一) 病人の歌 (二) 貧乏人の歌 (先生が多い) が詩面の大半を占めている點である。しかし、今回は戀愛に關するものについて一言するにとどめたい。

小さき肩いたはりてゆく夜の坂

石垣に光り雨は流れて

利根川保男 (潮汐)

逢ふといふそのことさへもかなはぬか

蕭條としてけふ雨の寒さ

田村 七治 (沃野)

眞夜にきく君のしはぶきわが部屋に

ひとりの膝を規すかなしみ

中村 好美 (短歌風光)

ゆくりなく道に逢へばと想像を

してゐる時の吾ははなやぐ

杉山 敬子 (郷土)

指切りを求むる君の稚けなし

小指出せば羞かみて掛く

濱島 曉 (短歌草原)

桐の花明るき影もつ塀に沿ひ

別れむとしてあゆみゆきたり

山口 智子 (未來)

貧弱に見ゆる君故に家人に

反對もあらむと覺悟して來し

清原 敏子 (創作)

むつみたる酒にはや寝て君のあり

雨と混らぬ潮ざるきこゆ

おりたちて四方を嘆かふ息ふかし

星またたきて天に位置する

早川 玲子 (同上)

乗り込むまでせめて二人と云ひたれば

幾月逢はぬ旅に今たつ

川原 利也 (詩歌)

さだめなるか愛せし君のおもかけを

秘めておかまじ心のうちに

天津ふさ子 (同上)

これらは多くの戀愛歌の珠玉を残した晶子、

牧水のものと比較してみるとまるつきりスタイルがちがつている。明治

大正、そして昭和初年のものはその殆どが象徴に終始していたが、前出

したものの中の中島氏、早川氏の如

きはなるほど象徴歌であるとも云えようが、

他は一見しても抒情歌である事がわかつた。

これは世紀がすすみ生活文化がますます分化

する事によつて歌にもられる材量がより細や

かな事になり、かかる面からも象徴的である

べき戀愛歌までが抒情歌となつたのではある

まいか。なお短歌の研究に従事される國文學

者が、和歌を抒情詩としてあつかつてこられ

ているが、考えようによつては實は抒情詩で

なければならぬのかも知れない。(W)

能谷とき子 (をだまき)

上木 葉葉 (同上)

日野 行雄 (國民文學)

風に揺るるリボンのごとしふと會ふに

あはあはとしばし心惹かれつ

中島 義勝 (心の花)

何も言はず頭をさげて出で來しが

歸りの途にそれを氣にせり

上木 葉葉 (同上)

君まつと線路の欄に身はもたせ

面は月に羞ぢらひて向く

能谷とき子 (をだまき)

現代の短歌 (一)



大乘のあゆみ (五)

第五講

眞野 正 順

現代の聖者と呼ばれるガンジーの言葉の中に、こういふのがあります。

『大海から汲み出された一滴の水は、休息することが出来るけれども、大海の中にある水は、一時も静止することはできない。絶えず動きつゞけてその休息を知らない。』

その様にわれ／＼人間もまた、大海即ち神と一體となるや否や、最早自己の休息はない。絶えず神と共に生き働き止まる事がない。しかも、この止む事のない不斷の活動の中にこそ、不思議な安らいがあるのであつて、この絶えざる活動が、實は眞の休息なのである。』

大海の水は、夜となく晝となく一時の止む間もなく、絶えず揺れ動いて不斷の活動をつゞけております。たゞこれ

を小さな桶の中に汲み上げた時だけ静止する。しかし、このとき、大海から切り離された桶の水は静止すると共に、やがて次第に腐敗してゆきます。人間もまたそうです。宇宙の大いなる精神と一體となる時、我々は忽ちその生ける不斷の活動の中に捲き込まれる。宇宙の精神そのものが絶えざる活動であり、成長であります。大きな不可思議な力がわれにもあらず、私を引摺つて、否應なしに絶えざる不斷の活動へと驅り立てゝ行く。

ところが、この大いなる全體から切り離され孤立してくると、人間はその生き甲斐を見失つて、やがて次第に腐つて行きます。全體を離れて人間の意味は無いからであります。

人は「宗教」なぞと云うとなにか、この現實の生活を捨て、夢の様な掴みどころの無い、ものゝ中に入つてゆくかのように思ふ。そしてその靜かな別世界の中で、しばし浮世の憂さを忘れてまどろむ事だぐらいに考へる。然し世にこんな大きな誤はない。その中に入れば其まゝ眠り込んで終ふやうなものなら本當の生きた精神ではない。そんなものは決して眞實の宗教ではない。——宗教の本當かウソかはむしろ此の處で區別されると思ふ。眞の生ける宗教ならば、大海の絶えず活動して止まない様に、そこに入る者を其中に捲き込みぐんぐ／＼否も應なしに不斷の激しい活動の中と押しやつて行く。

眞實の信仰に入れば、必ずジツとして居られませんか。

「眞實」が内から突き上げて来るからです。「眞實」とい

ふものは一刻も生きて止まず、夫自らを現はさすには居られないものです。この大いなる力に觸れた者は、必ず夫と共に生きようとする。その大きな活動に動かされる其の眞實を内から外へと現はしてゆく事業に参加しようとする。

夫れと共に、またこの小さな自分についても、我が内にひそむ誠なるものを力一杯展開せずには居られなくなつてくる。

かくて、こゝに内に外に眞實を展開する力強い活動が燃え上つてくるのです。

然し、ガンヂーの語つております様に、この激しい不斷の活動の只中に不思議な靜安が湛えられているのです。人の爲世の爲、身を粉にし心を盡し、その忙しい活動の中に自からどつしりとした安心が感ぜられる。絶える間もなく目前の事業に己が全身を擲ちながら、不思議や胸の何處かに靜寂な湖の様安靜が湛えられている。夫には恐らく自分は既に、永遠に不動なるものに根ざしていると感ずるからでありましょうか。譬へばそれはあの大洋の表面は夜となく、晝となく常に浪立ち揺らいで止む時もありませんが、その内面の底深き海底は、いつも永遠の靜寂を湛えてかわる事の無いのに似ております。

かゝる大洋のごとき深き信念を内にたゞへる者にして、初めて大いなる事業は、成し遂げられるのでありまして、あの世界の視聽をそばだたしめた困難なる印度獨立の大業を遂に成就し世の渴仰を一身に集めている聖ガンヂーの不屈不撓なる奮闘の秘密は實にこゝに横はつていたのであります。

然も、これはたゞ信仰の心の中の姿だけではありません。

ん。實は、この宇宙人生そのものが、かゝる大海の如きものでありまして、宇宙の眞實なるものが溢れ現はれて、この世の人生社會の營みをなすと説かれております。宇宙の中にひそむところの眞實なるものは、夫自らの姿を現はさずには居ません。その見えざる永遠の底から揺らぎ現はれて、物と生命とを通して、こゝに人生社會の姿を現す。大乘佛教によりますと、これを「清淨法性海の等流」と申しっております。淨き眞如の大海から溢れ流れて、現世のさまざまの善きものを形づくると申すのであります。

これを譬へて云へば、世界は、さながらかの揺らめく限りなき浪の大海であります。その中に永遠の眞實が湛えられてゐる。その底知れぬ永遠の深みから寸時の止むときも無く揺らぎ溢れて永恒にその活動を停めた事はありません。この大海の中からおのずから盛り上つてくる限り無き波浪は、次第に成長して次第に岸に向つて進みやがてドツと高く、磯浪を打上げる。そしてきらめく白い波頭を高く空に畫いたかと思ふ内に、その頂上より忽ちくづれはじめてすさまじい音響と共に一面の泡を散らして消え去つてしまふ。この莊嚴な大洋の浪の姿はまさにわれ／＼人間社會の營みの姿であります。この磯浪の高まつてはまた崩れ崩

れてはまた盛り上る姿こそ、我々の絶えず織り出してゆく社會の歴史の姿であります。

それは、絶えず崩れ去りつゝ、また新しく絶えず湧き上つてくる。その一つ一つはそれの持った運命に従つて、やがて消えゆく暫しの時間と歩むのでありますか、然も夫によつておのずから宇宙の眞實を畫き出して行くのです。その一つ一つを取つて見れば各々それなりに纏まつた姿を取つてゐながら、仔細にこれを見ればその何れもみな未完成であります。未完成でありますから、人類は必ずそれを踏み越えて進んで行かねばならぬ。こゝに絶えざる社會の進歩の機運があるのであります。然もその進歩の終局に到達しなければ、理想の眞實に觸れ難いと云ふ譯ではない。未完成でありながら、何處か全體の姿を映している。その一時の姿を通じその惱める姿を通じて、眞實に常に嚴そかに輝き出ているのであります。それが人間の歴史であります。

この様に考へれば、我々のこゝに結んでゐる、現代の社會や文化も實は永遠なる眞如眞實の大海に浮ぶ波の一つであります。大海の浪の限り無いように、人類の結ぶ社會もまたその數に限りがない。それ故、經典には、こゝに『限

りなき佛の國あり』を説いております。この數知れぬ國土民族は、すべて永遠なる佛の本質を現はして行く姿であります。その一つ一つ、何れも嘗て完全にその理想を實現し切つたものは有りませんが、然も、夫々の特長によつて何れも眞實の表現をしているのです。

それゆゑ、あらゆる民族は、たゞそれだけを列べて見れば、歴然たる價值の相違は蔽ひがたく、人類は決して平等とは申されません。

社會を、たゞ夫れだけについて平等を論ずるのは大きな誤解であります。人間その顔の異なるごとく、その社會もまた各々にその性質と運命とを異にし、かつて、こゝに平等の存したためしはありません。従つてまた、悲しいかな、かつて、こゝに平和の持續したためしはないのであります。

(7)

人類社會は、そのものに就ては決して平等である事は出來ない。然し、たゞ、これ等がおのゝく皆な、大いなる眞實を——森嚴なる佛心を表現する機會であり映像である事において、互ひにまつたく對等であります。決して、他を輕んずることは出來ません。民族は互ひに平等となる事は出來ぬ。たゞ、佛の前においてのみ平等であると、言はれるの

は此の故であります。

おそらく、人類が眞の平和をのぞみ得る道は、永遠にたゞこの一つでありましょう。平和は武器によつて支える事は出來ぬ。そのように、また、單に武器を捨てる事によつて望み得るものではない。眞の平和は、すべての國民が互ひに深き理解と同情のきづなによつてかたく結ばれることに依てのみ、初めて望み得るのです。それはたゞ、あらゆる國家國民がその深き根底において、すべて一なることを自覺し共感する事によつてのみ遂げられるのであります。

奈良東大寺の大佛は、しばしば兵火に罹り、聖武創建のころの佛をそのまゝ残しておりますのは、佛の座しておられる蓮華の臺座だけだと傳へられておりますが、近づいて花弁に目をそゝぎますと、その一枚々々にうづすらと山川國土の姿が畫かれその中央に小さな佛の座つていられる姿を彫り込まれております。この蓮華は即ち全世界のさまゝの國土民衆を象徵しておるのであります。世界のありとあらゆる民族の營む社會は、各その姿と運命とを異にするが、すべてこの佛の本質の映現に外ならず、皆この大乘の理想によつて導かれ、その偉大なる精神において結ばれて行かねばならぬ、と教へているのであります。

この大佛を建てた聖武天皇は、この理想をその儘、この日本の國土に現はして行かうと企てられたのであります。が、かゝる理想は實はこの狭い日本一國の内に止まるべきものでなく、むしろその本來の意義よりして、廣く全世界の上に伸ぶべきでありまして、世界の色とり／＼なる諸民族社會全體の上にこそ打建てられるべきものであつた。

いまや、すでに二次の大戦の慘禍をけみしましたけれど、世界は更に怖るべき深刻なる斷層の上に、新らたにさしかゝつて居ります。世界人類の胸に切にねがふものは、いかにかけて、この人間相互に殺戮し合ふ酸鼻なる兵亂を再びする事なく、永遠なる平和を確實に地上のものたらしめたい切なる念願であります。その道を約束するものとしてしきりに待望せられるあの世界聯邦の組成こそ、やがて、この大乘精神の現はしてゆく次の一步でありましやう。地上の國民たがい其の處を得て、たがい其特色を輝かしつゝ、その精神において一となる。この新たなる世界構成に際して、わが誇るべき東洋の遺産は、その偉大なる價值と光輝とを顯はしはじめるに相違ありません。その日の來ることを切に待つものであります。

(終)

上 味 噌 高 瀬 磯

人間が本能生活、經濟生活以外に何か心の依りどころを探し求めるのは、その人の程度の差こそあれ、自らの昇華を願う美しい慾望であると思います。

故に、人々は哲學、宗教、藝術、精神科學等いづれかを心の所依として、信じ、參究してゆくうちに幸いそれによつて精神の安定を得る人もあれば、深く入りこめば入りこむほど迷雲にとざされて思いもよらぬ苦惱を抱くことにもなります。

それは、それとして人間から人間へ幾世代に渡つて相傳され探究されてきたこれらの文化的所産に就いての講演を聴き、または著書を読み、更にその道の「人」そのものに當面した時、案外強烈なナルチスムス——即ち味噌臭さを感じて尊敬を失い、興味錯然となる場合が度々あります。

古語に「味噌の味噌くさは上味噌にあらず」とか、俗語にも「手前みそ」とか輕蔑的な言葉もありますが、その通り、名物の八丁味噌も三年もねかせておいた品と若味噌とでは味も香氣も比較にならずよく枯れたみそは味噌の臭みはすつかり抜けています。

佛教では教えを説く僧侶は月を指す「指」であるから「指」をみるな——と申しますがやはり教えを説く人の人格を通して月をみることになりましょう。すべて文化的指導者は焦らずゆつくりと自身の味噌くさを脱して貰いたいと思います。

佛心開眼



藤田寛海

この秋奈良の東大寺では大佛建立千二百年の法會が行はれたし、「大佛開眼」の劇映画

も作られるといふ。また、九月から十月にかけては世界佛教徒會議が行はれて、遠く異邦の佛教徒たちも日本に集つてきたし、極めて佛教色豊かな秋の訪れとなつた。

もともと東大寺といふ名前は「東の大寺」

の意味で、印度や支那の西の國々に對する東の國、即ち日本の大寺といふことで、其れは當時地方の宗教的中心として諸國に設けられ

た國分寺を統べる總分寺として、聖武天皇の御發願で創建された。

そして、大佛はこの東大寺金堂の本尊である。經典によると、佛名を、「ルシヤナ佛」といひ、千の國々の教首として其の中心に在ると共に、此れを繞る國々には小釋迦があつて説法をすると説かれてゐる。

東大寺建立の當時は、國家の統一といふ事が當面する至要の問題であつたから、此のやうな教理に基づいて各國分寺の本尊には釋迦

を安置し、總國分寺である東大寺にはルシヤナ佛が造立されたので、佛教の理想を國家の目標とされたことが御發願の基本であつた。

そして、此の大佛は完成までに五年の歳月がかゝつたが、途中で鍍金する金がなくて困つてゐたとき、たまたま陸奥の國から產出されたので其れを用ひて功を竣へた。天平勝寶四年、開眼の法會は一萬人の僧侶によつて行はれ、記録によると、天皇自から筆をとられて佛眼に點睛されたといふ。

爾來千二百年、總ては佛眼の慈光のうちに流轉した。

今年の秋は、千年もの昔の數々を心温かく想ひながら、佛を語り已れを顧る機に恵まれるのである。

然し、或る事が廣く人々に語られ、もてはやされると云ふことは、必ずしも其れが正しく理解されたといふことにはならない。嘗て戰時中に萬葉集が愛讀されたし、また源氏物語が人々の心を惹いたのは、つい去年のこと

であつた。そして其の時、此れらの古典に語られた清らかな心や濃やかな感情がどれ程理解され、人々の心はどのやうに覺めさせられたであらうか。それを想ふと、この秋の佛教的催しの數々が好奇心や激情によつてのみ迎へられ、單なるお祭り騒ぎに終らないことを願ふのである。

いづれにしても、東大寺大佛の建立は千年餘りの昔であり、佛教が我國に傳へられたのは、更にそれよりも古いのである。

千餘年、そして其の間の世の中の變動、それは口で云ふ程簡單なものではなかつた。想ふがよい。明治の初年以後世の中はどのやうな動きを示して來たであらうか。

千年餘りの長い年月、數々の動亂のうちにも、此の佛像が守り續けられてきたことは、また佛像といふ形に示された佛の教へそのものが時代の風雪を貫いて活き傳へられたことに他ならない。

戦前に東北の或る地方で一つの新しい宗教

が多くの信者によつてかゝげられ、大いに隆盛を極めたことがあつた。其れは一人の樵夫が山で切り倒した木の根の一部が奇妙な形をしてゐたので、持ちかへつて祀つた事に始まると聞いてゐる。然しそれ程に盛であつた宗勢もやがて衰へて、十年も経ぬうちに信者も雲霧消散してしまひ戦後は全くその名前さへ聞かない。

此れは一體どうしたわけであらうか。

「鯛の頭も信心次第」といふ言葉も古くか

らあるから、鯛の頭でも木の根でも、あらゆる物は信ずる人の心を清め救ふ力を具へてゐると云へるかもしれない。然し世の中は何時も平靜とは限らないし、人の心もまた常に一様ではありえない。此の木の根が全く見すてられ、その信仰が時代の風雪のうちに崩れ去つてしまつたのは、それが「眞」に深く根ざし、どんな相の時代に於ても常に變りなく心の救ひとなりうる正しさと強さをもつてゐなかつたからである。従つて、「鯛の頭も信

心次第」といふのも、信ずる「物」をいふのではなくて、信ずる「行ひ」がどんな場合にも肝要であるとの教へと思はれる。

人は數々の試練と難關をへて大成されるが、またそれを経ることによつて強さと正しさとが認められる。正しく強いからこそ時代の風雪を貫いて生きようと云つてもよいであらう。

千二百年もの昔に作られた大佛、更にそれよりも古くもたらされた佛教の「古さ」即ち長い時代の風雪を貫いて今に及んだといふことは、其の正しさと強さを示してゐる。竟り「古い」と云ふことは、今のものよりは劣つてゐるとか、現在には適しないといふことに直ちには結びつかない。

たゞ、此の古くもたらされた佛の教へを、その當時とは甚だしく異つた世相の現代に如何に生かし、また次の世代へ傳へてゆくかは、「今」を生きる我々のつとめと云はねばなるまい。

映畫

大佛
開眼

千二百年記念に當り、過去の盛儀を偲びつつ東大寺にて記念法養が行われた。

このとき、大映は長田秀雄の戯曲「大佛開眼」の映畫化を志ざし、この秋の藝術祭を期して華々しく公開すると言ふ。まことに意義ある事と云はねばならぬ。その目的とするところを、シナリオのはしがきに見るに、

「東大寺造立、大佛建造の目的が、聖武天皇の國家公共の福祉のためであつたことは明らかであります。當時の人々は、學識ある人も、又民衆も、大佛を信じ敬うことによつて、現世の平安を得ると考えて、疑はなかつた事も事實であります。……現在の平和を熱望する輿論と思ひ合せ、大佛造立の意味を、一層判りやすくするため、この映畫を造る」とされている。

これが映畫である爲、その内容は必ずしも歴史的事實を傳えていない。鑄造師國人と、それにまつわる人間的な喜怒哀樂の世界は、假空の世界である。然し幾度かの災害にあいづも、今日尙ほ、この大佛（勿論昔のもの

そのものでないが）を見、そしてその偉大さに驚く吾々が、その造佛者の意圖と、これにまつわる人間世界の様々な様相を考へるとき、思い半ばに過ぎるものがある。そしてこの映畫は、そうした面をよく捉えて居る様に考へられる。今日に於てさへ至難なこの事實が、千數百年前に爲し遂げられた事を考へるとき、正に國家的な大事業であつたであらう。そして、このことの達成には、國をあげての平和の祈念が預つて力あつたであらう。

今日平和を叫ぶ中に、果してどれ程の具體的な事が行はれているであらうか。單に空念の佛であつてはならない。こうしたときに、この映畫の出る事は何と言つても、意味あるものと言えよう。

映畫には映畫としての立場がある。シナリオを讀むだけでこれ程の事を云うのは可笑しいかも知れぬ。唯吾々は種々な意味に於てこの完成を鶴首待つと共に、少くもその目撃されてゐる一面を想ひ到つて見る事も無駄ではあるまい。



勤勞の苦痛を尊敬し合いませう

小笠原 秀實

1

人間はお互の勤勞を交換し合うことに依つて生存をつゞけて居るのあります。そればかりではなく、これに依つて文化的な繁榮、向上という立派な結果が生れているのであります。

お互の勤勞を軽く見すぎたり、他の人々の勞苦を自分の勞苦に較べて低く見たりすることは、人間の本質にもそむき、又世界の進歩、平和を維持することにはなりません。世界史を光榮あるものに仕上げるためには、人間本来の性を尊敬し、ともに同じ願いを懷いている希望に向つて敬意を拂い、この願行の満足して行くであろう生き方をつゞけて行かねばならぬはすであります。

どうかすると勤勞に高下をつけたたり、職能に上下の差別をしたりすることもあります。すべて人間性の平等な尊嚴ということを基礎にして、世界史を整理して行かねばな

りません。

2

平安朝のなかごろに空也上人という有名なかたがありました。このかたのお弟子のなかに、三人の珍しいことをする人たちがありました。ひとりの人は道に落ちてゐる瓜の皮を拾つてあるきました。もうひとりの人は繩の切れやわらじの切れたのを拾つてあるきました。又もうひとりの人は紙屑を拾つてあるきました。さてそうしたものをどういうことに使われたかということについて申上げたいのであります。それはすべて勤勞苦の尊敬ということになるからであります。

3

瓜の皮を拾つた人は、きれいに洗い清めて牢屋にゐる人たちのところへ持つて行つて供食することにしました。又

繩や草鞋の切れなどを拾つた人は、これもきれいに洗い清め、細かに切つて壁をぬるとき材料になる「すさ」というものをこしらえました。「すさ」は壁土をつなぎあわせ、土のこわれない役をします。ところがその「すさ」を普通の壁の修繕に使われたではありません。佛さまにいちばん近い佛堂とか、又佛さまの祀られてある佛龕とかいうものの修繕に使われました。こゝに考えてみなければならぬことが含まれております。

道ばたに捨てられ、牛や馬の脚に踏まれたような汚れたものをどうして神聖な佛堂や佛龕に使われたのでありませうか。この物語の出ている書物には別に詳しい説明はありません。たゞ人のしないような奇特なことをされたというだけの説明になつております。そこでこの奇特ということについて考えてみたいのであります。

4

瓜の皮の場合も、繩切れ、紙切れの場合も簡単にいえば廢物利用ということになります。すたれたものを活かして使うということでもあります。けれども廢物利用ということに二つの意味のあることを見わけねばなりません。一つは軽い意味で、役に立つものを捨てゝはならない、生かして使わねばならぬということでもあります。それはお互によくわかっていることであります。けれどももうひとつの深い

意味になりますと、まことに奇特ということがはつきりするように思われます。

瓜の皮でも、繩、紙の屑でもみな人間勤勞の產物であります。勤勞の結果やつとできあがつたものばかりであります。この苦勞の結果が完全に使いはたされていきますならば、人間の勤勞苦は満足してやすらかに眠つて行くのであります。けれども勤勞苦の結果がまだ生きのこつてゐるのに、そのまゝ捨てられてしまつたということになると、人間の勤勞苦は目をつぶることができません。道ばたの繩切れや紙屑も役に立たないものとして足蹴にされているのが普通であります。けれどもそこにはまだ役に立つ勤勞苦というものが生き生きとして目をさましているのであります。この勤勞苦をたゞ拾いあげるといふばかりではなく、ひとたび卑しめられ足蹴にされたものの悲しみを、何とかして癒してみなければならぬという精神が生れて來るのであります。この悲しみを癒してあげたいという精神が古繩や草鞋の切れで、神聖な佛堂、佛龕を修理し、おほぜいの人に拜まれる高い處に祀りあげねばならぬということになるのであります。卑められた人間の苦痛というものが、いちばん尊敬されねばならないというのが、人間の眞實であります。この良心が次第に擴げられ、すべての人々の心にしみこみますときに、世界の歴史はまことに輝かしい光を持つのであります。

また道ばたの紙屑を拾い集めた人は何をしましたか。その人も紙屑をきれいに洗い清め、清浄な紙にすき直しました。そしてこれに經文を書いて一卷のお經に仕あげました。この人の精神も前と同じことでもあります。お經は立派な眞理が文字の形を以つて光つているのであります。神聖といえどこれほど神聖なものはないともいわれます。それがいちどは牛や馬に踏みつけられたのであります。その苦痛と悲しみとが報いられて神聖な壇上に飾られるのであります。踏みつけられた人間の勤勞苦が、こゝに改めて尊敬されているのであります。

5

ドストエフスキの作品中に有名な「罪と罰」というのがあります。その中に出て来る大學生であるラスコルニコフというのは、近代思想に養われまして、自我の尊嚴に目ざめました。そして世界を正しいものに仕あげねばならぬということを考えつきました。兵權や政權などの權力を握つていた物質上のナポレオンは立派ではありましたが、たゞ歐羅巴の地圖の色わけを変えただけのものでありません。

眞の意味での立派とはいわれません。眞の意味での立派なものは人間の精神と道德とを変えてしまわねばならぬ。これには物質上のナポレオンとは違つて精神上のナ

ポレオンにならねばならぬという考になりました。

さて精神上のナポレオンは何をしなければならぬか。それは正しくないもの、無慈悲なものを地上から無くするということでありました。その頃ラスコルニコフの住んでいた街に、高利貸を営み、大ぜいの貧しい人々を困らせているお婆さんがありました。難儀している大ぜいの貧しい人々を救うためには、社会的な苦痛の種にもなつてゐる剛愎な婆さんを倒してしまわねばならぬと考え付きました。いわば社會の幸福のために、社會的なダニを倒すということになります。この公共的な考から遂にこの婆さんを殺してしまいました。けれどもこうした無謀なしわざは決して彼を安心させませんでした。殘酷な行爲についての後悔と良心の呵責とが彼を苦しめつゞけました。「何うしたらいいだろうか」このことを遂に愛人のソニアに訊ねました。ソニアは懺悔をすゝめました。それはいちばん大ぜいの人々に踏みつけられた十字街頭の地上に膝まづき、額と唇とを大地につけなさい。そして自分は人殺しの罪人であることを大ぜいの人々の前で告白しなさいということでありました。それはすべて卑しめられ、踏みつけられて來たものに無上の敬意を拂ふことであります。それは懺悔の精神であるとともに又新しい人道を正しくもりあげる基盤になるのであります。

これは近代精神のあらわれであります。上に申しました空也上人のお弟子たちの精神と同じものが流れているのであります。最も大ぜいの人々に踏まれた十字街頭の地面に額をつけることと、牛馬に汚された縄切れ紙切れを洗つて佛堂に祀り、お經をこしらえて、頂き敬うということとの間には同じものがつゞいているのであります。それは懺悔の心と謙讓な心とがつながり合つているのであります。

世界の歴史を光と幸福とに導いて行くのには人間の勤勞苦をお互に尊敬し合うということが何よりも大切であると存じます。

もうひとつ附け加えて申し上げます。空也上人と同じような時代に、大和の元興寺に義紹院という學問の深い法師がいました。この義紹院が冬のある寒い日、京都から大和へ歸へられる途中、木津川のほとりに出ますと、そこに墓があつて、ひとりの法師が菰をかぶつて臥ておりました。死人ではないかと馬を近づけてよく見ますと、かすかにふるえているのであります。

「どういふ者か」と訊ねられますと

「乞食であります、寒いのでふるえております」と答え

ました。義紹院は氣の毒になり、上衣を脱いで馬の上から投げ與えて

「これを着なさい」といゝました。

ところが意外にも乞食は怒り出して立ちあがりました。

「何をするぞ」といつてとがめました。そして又つゞけていゝました。

「物を施すのなら、馬から下りて施しなさい、こうした無禮な施しは受けたくない」。

といゝました。あまりのことに義紹院は驚いてしばらく、「ぼつ」としておりました。氣がついて乞食を見直しますと、もうそこにはおりませんでした。義紹院は夢かと思いましたが、落付いて考えてみますと、ふと心に浮んで來たことがありました。それは人に物を施すことには謙虛な心持であらねばならぬ、そのことを佛さまが教えられたのではないかということでありました。そして乞食の消えて行つたあとをていねいに拜みました。

施すのには傲慢な心持があつてはならぬからであります。施す人も施される人も、互に拜み合うのが人間の眞理であるということになります。打つ人も打たれる人も、又法律の前に立つて裁く人も裁かれる人も、ともに人間としての眞實の大道の前に立つているのであります。自分の狭い小さい間違つた考を離れて、眞理をもちたてゝ行かねばならぬのが、人間生活の原則であります。

これまで申上げました人たちのこと、空也上人のお弟子たちのことにしましても又義紹院のお話にしましても、そして又ラスコルニコフの懺悔の精神にしましても、今我々がそのまゝのことをするといふことはできません。時もちがつております處もちがつております。それにいくらか物語にしておかざりもあるはずであります。けれどもそこに流れている精神の光を見出すこと、又人間はお互に人格の

尊さをみとめ合わねばならぬこと、そして又勞働の苦痛と生活の悩みというようなものを、お互に尊敬し合わねばならないということこれらのことが、はつきり現われているのであります。このことはすべての人々に納得できることからであると思われられます。

全世界の光と幸福とは、この眞實の大道をお互に守り合うことに依つて、立派に輝くことでありませう。この精神がすべての人々にもれなく行きわたることを祈つてやまないのであります。

浄土の集ひ

松 庵 寺

ルポルタージュー

戦災に一山焼失、檀信徒亦同厄に遇ひつゝも(二三頁、詩参考)、寺檀信徒の尊い信念によつて、今では、假本堂(十一間六間半)山門、鐘樓、觀音堂等も復興、之に並行して、幾多の淨き教化の事業が行はれ、淨土の御教は町々に溢れ、信仰の火をとぼし、寺は町の明るい心の中心として親しまれてゐる。ここに松庵寺この頃の淨土の集ひを項目だけ御知らせ致します。

◇ ◇ ◇
定例の集ひ

○毎月七日と十七日夜 婦人の集ひ(法話、和讃、座談會、靈場參拜等)

○毎月廿五日午前 法然上人講(一般)(法話、一枚起請文讀誦、黒谷和讃、晝食會食散會)

○日曜教園(毎日曜百名余集會) ○日曜禮拜 毎日曜日(朝六時より七時まで、中學

生、二十七名) ○佛教青年會 毎日曜日夜七時より(十七名) 1、佛教聖典輪讀

(眞理刊青年版) 2、信仰座談會。3、兒童教化材の實演研究。4、ハイキング、レ

クリエイション等

○聖歌の集ひ『パドマ』(毎月第一土曜夜

1、佛教聖歌の練習 2、佛教美術の觀賞等 3、スクエアダンス等)

不定期行事(月一回乃至隔月開催)

○子供會(童話、指人形、幻燈、ペープサード、唱歌等) ○お母さんの集ひ(P.T.A 共催、子供の心理、兒童福祉等のお話と座談會) ○文書傳道『松の庵り』發刊。

○生活學校 一日一夜生活(青少年対象)

附設事業

○兒童遊園(各種遊具備付) ○兒童文庫。(兒童圖書備付) ○季節保育所。春秋二回開設。○生活相談所。○兒童文化協會。

本年度中重なる不定期集會

1、佛教講座 一、(五月) 二、(九月)、(テキスト信徒必携) 2、簡易五重會 六

月十五日 3、第四回法然上人講座 4、聖歌と青年の夕べ 五月七日 5、ハイキ

ング(志戸平温泉) 九月十四日 6、月夜の集ひ 十月 7、簡易五重會 十月下旬

(青年會代表太田他敬報告)

善と悪



山田鏡瑞

失禮なつまらない體驗であります、之は事實であります。前に淨土宗新聞に出した時はカットされ念佛の事がけづられておりましたので、私としても如何しても今一度、しつかりとあの夜の事を通じ、佛教の宗祖の御教を體して生活して行く身の力強さ、有り難さを分つて戴き度書いて見ました。

(筆者)

七月廿四日の午前零時過ぎの事、お内佛の部屋で寝てゐた私は隣室で寝てゐた妻に烈しくゆり起された。

覆面の男がつゞいて私の部屋へぬつと這入つて事だ。

續いて素面の若い男も。

瞬間私はとう／＼這入られたなと思つた。

時が経過するにつれて私の氣持も次第に落ちついて來た。一つには私を見張つてゐた素面の青年が餘りにも子供っぽい顔をしてゐたためでもあつた。二十歳位の優しい青年であつた。でも隣室へ這入つて行つた強盜と同じ

ように臺所から出刀包丁と鋏を兩手に持つてゐた。「君は此の近くか……何處かで見た事があるようだ。」青年は首を振つて「違ひます」と答えた。丁寧な言葉だ。「川向うかね」とたづねると、ゆつくりとうなづいた。

「君の家の宗旨は何宗かね」「禪宗です」。

「そうか」と私もうなづきながら現代の青年で自分の宗旨を即座に答えるのは偉いと思つた。「此寺は淨土宗と言う念佛を申す宗だよ。嬉しい時でも、悲しい時でも、淋しい時でも、いら／＼した氣持の時でも念佛を申せば氣持がよくなるのだ」と言つて私は隣で仕事をしてる強盜にも聞えるように事更大きな聲で、南無阿彌陀佛と六七回唱えた。すると、隣から「坊さん念佛は止して呉れ、俺は念佛は大嫌いだ。俺は悪人だから死刑になるかも知れん。その時は唱えて呉れ」「あゝよいとも、然し念佛と言うと若い人は嫌がるが、そんな嫌がるものではない。生きてる内に念佛の話をしてやろう」強盜は黙つて又仕事を始めた。「君には兩親はあるかね」と又私は若い方にたづねた。「おふくろだけです。おやぢは小さい時死んだから覚えてゐない」すると隣で仕事をしてる強盜が又口を入れた。「坊さん、こんな事をする奴には縁な兩親は

居ないよ」「そうか、君には両親はないのか」「うんないよ」「私も幼少の頃母を亡くした。やつぱり母親の愛情は知らない。皆んな同じような境遇ぢやないか」何だか急に氣の毒になつて來た。因縁とは云え一方は強盜をしなければならぬのか。自分は一カ年の住職として佛様のお蔭で、毎日安心して過させて戴いてゐる。然もこうした男を救い得ないで、どうして明日から人への教化が果されよう。と自己の立場と責任を思い、眞剣に強盜と話し合つて見ようと決心した。

隣で仕事をしてる強盜に向つて質問した。「君は盜棒なぞやつて氣持がよいか。本當に君の氣持がそれでよいのなら何とも言はない。どうだ」「そりや良い氣持はしない。他に仕事もなし仕方なしやつてゐるんだ」私はその言葉を聞くと立つて行つて、「そうか、仕方なしにやつてゐるのか。然し君も若いし末が長い事だから仕方なしにやつてゐるような仕事は止した方がよいよ。良い氣持になる事を考へて見ようぢやないか。此處へ坐りなさい」「うん」とうなづいて素直に私の側へ來て坐り覆面を取つた。見れば二十六、七才の淺黒い顔をしたしつかりした青年である。若い方も私の横へ來て坐つた。

………
私は法然上人の御法語にある。「惡人は惡縁によりて生ずる……」と言う言葉の意義を話してやつた。

「同じように復員して來て、私は善縁に逢つた。君は惡縁にあつたのだ。私が善でも君が悪でもなかつたのだ。殊に君が最前こんな事をするのは悪いにきまつてゐる言つたが、君は未だ悪い事を承知しているだけ善良なんだ。世の中には善い事だと思つて悪い事をしてゐる人も居る。自分や家族の事だけを考へ、それでよいのだと考へてゐる人もある。それもよい。然し世間には自分等の想像もつかない氣の毒な生活をしている人もゐるからね。又君のように場合によつては直ぐは働きたくとも働けない人もある。自分等だけでなく、そうした人々にまで思いを致さねばならない事があるのだ。殊に私共佛教徒はね。私がこうして話していると、説教めいて聞えるだらうが決して君に説教しているとは思はない。反つて無言の説教をされてゐるような氣がするよ。佛教は無我を説き、坊さんは特に欲を離れなければならぬのだ。その意味では君に物をとられても何でもない筈だ。然しなか／＼そこまでは思えない。やはり取られれば損をするような氣がする。とられた金があれば、あれにも使える。これにも使えると思ふからね。使ふ事が必ずしも世の爲、人の爲にするのならばよいが、なか／＼そうは出来ない。考へて見れば君より私の方が悪いかも知れない。……然し之は私の反省だ。君は君自身で反省しなくてはいかんよ。私も若い頃本でも讀み、映畫でも見て、やくざの世界も、君等の氣持も分るような氣がする。親分子分の關係が命よりも固い場合もあるだらう。然しそれが間違つたと判つた時、その惡縁を斷ち切る勇氣があると思ふが、どうかね」「仲々抜けれないんだよ。親分や兄弟分の眼が光つてゐてね」彼はそこでつく／＼と太息を吐いた「勇氣か」と呟いた。「そうだ勇氣だ。こんな淋しい所へ這入つて來たり、又如何な強い男が居るか分らんような所へ這入つて來る事は勇氣があるように思ふかも知れないが、そんな勇氣は蠻勇だ。本當の勇氣があるなら、親分に殺されようが、兄弟分に何と言はれようと、そうした間違つた仲間から飛び出して來る事だよ……」

こんな話をしてゐる内に私も強盜もすつかり打ち解けて、町の青年と話をしてゐる場合と同じ氣持にさえなつて來た。強盜もすつか

り落ちついて来て私に對する言葉遣いまですつかり變つて來た。先前仕事中に盗んで、ポケットの中に入れてゐた妻の時計と指輪二つを出して、「段々話を聞いて見ると之は持つて行く氣になりません」と、先前やつた五千圓と共に私の前に置いた。

「時計と指輪は妻のものだから置いて行つて呉れ、それに父に買つて貰つた品で今では形見の品だからね。然し金の方はやるよ。だが皆持つて行かれても困るから三千圓だけあげよう。君の豫定の十分の一だ。話して見れば君も世間の人と變りはないよ。善人だよ。こんな事をするのは悪いと思うだらう」「そうです。こんな事は人間のすることではない。動物のする事です。到底正氣では出来ませんよ。」「それぢや一杯引つけて來たんだね」「そうですよ、今晚も一杯飲んで來ました」「そうか、大分酔もさめたようだ。又一杯やるか」

二人で酒を飲みながら語り續けた。

「さつき君は念佛は嫌いだと言つたが、何も君だけではない。今日の若い人には念佛は間違つて考えられてゐる」「そうかね」「難しく話しても分らないが、簡単に言つて見れば、念佛と言うのは、拜む心の事だ。念佛生

活とは拜み合つて生活して行く事だ。總べての因縁を有り難いと受けとつて眞剣に自己の正業を勵む事だ。人は色々な事情があり、境遇も異つてゐる。外部の事にのみとらはれて、比較してると、不足も不平も出て來て感謝の氣持もなかく、湧かんかも知れん。そこが又念佛だ。我慢も念佛、反省も念佛、君にしても、私にしても生きて歸つて來たればこそ、なんだかんだと我が儘も出て不足も言うが、一步進んで考えて見ようぢやないか。苦しんで死んで行つた職友達の事を思うと、生きてゐる事だけでも少しは有り難いと思はねばならんよ」「そうだね」「そこだよ。此の世の事をば教では娑婆と言うが、それは忍土と言う意味だ、總べてを忍ぶ土地だ。忍耐だ。嫌な事があつても、悲しい事があつても忍ぶ事だ。人事ではない。自分自身でもつかり忍んで行く事だ。難かしい事だがね。私だつて色々不足もある。思うようにならん事も多い。それを我慢する事だ。念佛してゐると自ら氣持も落ちつき開けて來るものだ。總べてを有り難く、一切の人、色々な事のおかげと受けとつて行く所に本當の力は出て來るものだ。法然上人と言う浄土宗の開祖は晩年には一日に七万遍も念佛を申された。之は言い

換えれば、刻々を力強く、感謝でもつて生活されたと言うことだ。眞實の生活をしつゝけられた事だ。到底私共には出来ない事ではあるが、そうしたものだと思つて生活する事が私共佛教徒の否人間の生き方だ」

「坊さんは青の洞門の坊さんの事を知つてゐますか」「あゝよく知つてゐる。君のように始めは強盜であつたが改心して村人の爲に随分苦勞してトンネルを掘つたのだ」「そうだ。偉い坊さんだな」「君もその人のようになればよいぢやないか」「いや、なか／＼なれないね」「そこが念佛だよ、一生懸命やる事だ。」「私も出来ないまでもせめて親分から離れて正業に就きたいな」と獨言を言つた。

強盜もすつかり落ちついて、次々に自分のやつて來た事について質問した。それを一つ／＼私も眞剣に佛教の立場から話してやつた。遂に朝の四時まで語り續けた。大變感激して固く／＼私と握手して、必ず御禮に來ますと言つた。爺やが裏口をあけてやると二人は庭へ飛び下りて、ゆつくり靴の紐を結んで、何回も／＼お辭儀をして裏の杉林の方から歸つて行つた。

強盜を救つてやつたと言うよりは強盜に救はれた事の幸、否、強盜でも自分でもない。二人共に佛様に救はれたのだと、今日漸く思はれて來た。

阿彌陀經の話

(四)

藤井實應

「また舍利弗、極樂國土には七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹あり。皆是れ四寶をもて周匝し圍繞せり。是の故に彼の國を名づけて極樂という。」

また舍利弗、極樂國土には七寶の池あり、八功德水その中に充満せり、池の底には純ら金沙を以て地に布けり、四邊に階道あり、金・銀、瑠璃、玻璃をもつて合成せり。上に樓閣あり、また金、銀、瑠璃、玻璃、磲磬、赤珠磬磬を以て而もこれを嚴飾せり。池の中に蓮華あり、大さ車輪の如し、青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり舍利弗、極樂國土には、是の如きの功德莊嚴を成就せり。」

釋尊は、舍利弗はじめ多くの弟子や聽衆に對し、説法をつづけられます。

「また舍利弗よ。極樂國土には、七重の欄干七重の窓掛け、七重の

並樹があつて、どれも金や銀や瑠璃（青玉、エナメルド）や水晶の四つの寶をもつて作られ、飾りたてられて、國の至るところ、こゝかしこをめぐっている。かのように楽しいところであるから極樂と名づけるのである。

また舍利弗よ。極樂國土には七寶（金、銀、青玉、水晶、磲磬、〔貝殼〕、赤眞珠、磬磬）の池があつて、八つの徳ある水（八功德水）すきとおつて、つめたくて、あまくて、やわらかで、つやゝかで、のめばこゝちよく、くすりになつて、身も心も丈夫になる）がなみなみとたゞようている。池の底には金の沙が布かれている。池のまわりには金や銀や瑠璃や水晶でできたうるわしい四つのあがりがだんがあつて、その上に立派な御殿がある。これも金や銀の七寶でかざりたてゝある。池の中には蓮華が咲いている、大さは車の輪ほどもある。その花は青い色には青い光あり、黄の色には黄の光あり、赤の色には赤の光あり、白の色には白の光があつて、たえなる

香りはまことにきよらかである。舍利弗よ、極樂國土にはかような徳の高い莊嚴やうぎによつて立派に出来ている。」

極樂は何と美しい世界でありましょうか、光まばゆく照り輝いてしかもすきとほつた淨らかさ、お經に示された通り、この邊りは朗々と拜誦すべきでしょう。説明をするだけその美しさ淨らかさから離れる氣がいたします。

しかしそれでは「阿彌陀經の話」にもなりませんから、二往のお話も試みますが、話し了つたなら、話などサツとすて去つて、本文によつて心靜かに拜誦して下さい、それを最初にお願ひしてなくもがなのお話をお許しいたゞきない。

こゝに示されたところは、極樂の依報と申して淨土に生れたる者の身心の依りどころとなる果報即ち山川、大地、衣服、飲食等のすがたを象徴的に述べられた一節です。はじめに寶樹の莊嚴やうぎ次に寶池蓮華の莊嚴が説かれています。

これらの文を拜するにも、前に一言しましたように、科學の書を讀むような心で見ましてはお經の意は受けとることは出来ません。

信の眼を開いて見なければなりません。單に客觀的に煩惱の眼から見れば、金銀も眞の寶とはならぬのであります。そこがむづかしいところだと思ひます。ともすると先づよく理屈で考えて納得が出来たら拜みもしよう信じもしようといふます。尤もなことです。

今日の學問の仕方がそくなつてゐるのであります。大切なことで

これを輕んじてはなりません。しかしながら、學問の方でも一往理解ができたなら實驗をして更にその知識を確かめるのであります。佛教は知を重んじ理論を尊びます。しかし佛教も宗教であつて、佛法の大海には信を以て能く入るといわれるように、先ず佛陀釋尊はわれらの教え主であり、釋尊の體驗實驗の上に説かれた法にあやまりはないと信じて、その法の如くに修行するのであります。法を修し行じてその法が愈々明かに信ぜられるのであります。即ちこの經に説かれたことも、後に「一心不亂に念佛せよ」と示された如く、念佛することによつて今説かるゝところも明かとなるのであります。言葉をかえて申しますと、阿彌陀佛のことが分つてから念佛し禮拜するといふよりも、むしろ念佛し禮拜することによつて阿彌陀佛が明になつてくるのであります。ありがたくておがむのではなく、おがむからありがたいことが出てくるのであります。

ですから、こゝに示された極樂の莊嚴も念佛申すことによつて明かに内感されることを最初に心えておきたいのであります。

或人は極樂の金銀づくめの樹木よりも、松杉、檜と青々した樹木の方が、美しいと申しました。その人もこの經文を只客觀的にながめしかも固定化した死んだ見方をしたからこのような言葉になつたのではないのでしょうか。極樂は眞實にして（無量光）永遠なる（無量壽）世界であります。大光明界であり、大生命界であります。前に説かれたように「今現在說法」の世界なのであります。金、銀、

瑠璃というような寶に莊嚴されたることもこの生命界の眞實をあらわし、これがそのまゝ説法となるを示されているのであります。

(そのことは少し後の所で一層明にされます) 生きた世界ですから、變化し、伸展し、生長します。極樂の樹木も金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹或はそれらの四寶でできた生きてる樹木です。それぞれ特色ある色彩、枝振り、様々の姿をあらわしつゝ、それが七重の並樹、となつて整然としてをります。七重の欄干、七重の窓掛け、七重の並樹、そこに七寶輝く美しい御殿があり、七寶の池に八功德の水がみちみちて、美しい蓮華が咲いている。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光とそれぞれ特異の色彩をもちそれぞれ特異の光を放つてをります。そして全體が調和してをるのであります。大生命大調和の世界を一如法界いちにぽうかいと申しております。

青色には青光、白色には白光、これはたゞ蓮だけのことではありません、一如法界にあるすべての事々物々、みな悉く青色には青光、白色には白光で、それぞれそのものゝもちまえがあつて、その特色をもちその所を得てそれぞれに光つているのであります。

コーサラ國王波斯匿王ハシノクが或日、遊獵に出た歸りにカピラ國の長者摩訶男の花園へ立寄つて休息せられました。ハシノク王が馬から下りると、摩訶男の所に働いていた一少女はいそいそとして出迎えしました。「足を洗うから水を貰いたい」と王がいうと、少女は日の照つている水溜りから温くなつた水を蓮の葉に一杯もつてゆきまし

た。王はそれで足を洗い、今度は「顔を洗いたい」というと、少女は冷い水と温い水とを混ぜ合せて持つて行きました。次に王は「飲む水がほしい」といわれると、深い井戸から冷たい水を汲んで持つてゆきました。王は感心して少女に聞きました。「少女よ、この園には三通りの水があるのか」「いゝえ水に變りはございません」「どうして三通りの水を持つて來たのか」「御足をお洗ひになるときは、わざとぬるい水を持つて參りました。お顔をお洗ひになる時には、お目に觸らぬようにと存じ冷たいのとぬるいのを混ぜました。お飲みになる水はできるだけ冷たいのがよいと思ひました。水の深いところから持つて參りました」少女はかう答えました。王は少女の行届いた親切な心がけに感じて、特に摩訶男に乞うて自分の夫人にいたしました。それが有名な勝鬘夫人であります。

つめたい水、温かい水、なまぬるい水、それぞれその所を得て、それぞれの特色をもつて生き王もよろこび、少女もよろこび、摩訶男もよろこびみな共生きすることゝなりました。

天龍寺中興の祖といわれた滴水禪師は、はじめ備前の曹源寺儀山老師に參じて信行してをりました。或る夏の夕方、儀山老師が風呂に入つて、少し加減が熱いというので、小僧を呼んで水を持つてこいといわれた。小僧はそこにあつた手桶をとりあげ、底に少しばかりあつた水をザツと地面にぶちまけ、急いで水を汲みにゆかうとしました。すると、儀山老師は雷のような聲で「馬鹿坊主」とどなつ

た。「はい」とびつくりして仰ぎ見ると、巖山の炬のような眼光に射すくめられた。「物は大は大、小は小、それぞれ所用があるぞ、なぜ活かして使わぬかッ、僅かな水でも、それを木の根にやれば木も喜び、水も活きるじやないか、修行をするものは隱徳が第一じやぞ、この無道心！」「はい」「馬鹿坊主め」。この痛い誠めが小僧の肝に銘じ骨に刻まれました、一滴の水も粗末にしてはならぬ。それぞれによさがある、それぞれに生きる、故に生かさねばならぬ。この精神を萬事萬物に應用すべきであると、後に「滴水」の二字を座右の銘とし、遂にその號とするに至りました。「曹源一滴の水、生涯汲めども盡きず」と感謝せられたということでもあります。

極樂の池に八功德の水がみちているというに因んで水の話になりましたが、水だけではありません。天地にあるあらゆる物はそれぞれに特色ある獨自のはたらきをもつていて、他のものゝできない力をあらわすところにそれがみな生きるのであります。それぞれに差別の相があるように、そのはたらきもちがつてをりまして、それが全體としてよく調和する、それが生きる世界のすがたであります。殊に人にはそれぞれ個性というものがあり、それぞれのもちまえがあり、それを充分發揮伸展せしめる時にそれぞれ生きることができ、それは又他を生かすことにもなります。何とゆたかな、廣やかな和やかな生々した世界であることでしょう。極樂世界にはかような徳の高い莊嚴が満ちておると説かれたのであります。

奥州花巻といふひなびた町の
淨土宗の古刹松庵寺で

秋の村雨ふりしきるあなたの命日に
まことにさゝやかな法事をしました

花巻の町も戦火をうけて
すつかり焼けた松庵寺は

物置小屋に須彌壇をつくつた

二疊敷のみ堂でした

雨がうしろの障子から吹きこみ

和尚さまの衣のすそさへ濡れました

和尚さまは静かな聲でしみじみと

型どほりに一枚起請文をよみました

佛を信じて身をなげ出した昔の人の

おそろしい告白の眞實が

今の世でも生きてわたくしをうちました

限りなき信によつてわたくしのために

燃えてしまつたあなたの一生の序列を

この松庵寺の物置御堂の佛の前で

又も食ひ入るやうに思ひしらべました。

世界の平和は 佛教によらざれば 期待しがたし

—伊藤述史世界佛教徒會議長は語る—

佐藤賢順

結束を固くした効果は相當なものであつた。これが今後の世界平和に寄與するところも、また貿易上に便宜を興えることも大きいであろうし、その意味で、この會議は充分な成功であつたと思われる。しかし私がいま冒頭に出した命題は、會議と直接關係ある報告ではなくて、むしろ思わぬところで出會つた佛教の眞の知己についての

眞の世界の平和は佛

教によるより以外に望むことができない、などという、極めてお座なりのことをいつてゐるように聞えるけれども、これは單なる式辭やメッセーの文句ではない。九月二十五日から一週間、東京築地本願寺で開かれた第二回世界佛教徒會議は、いろいろの點で收穫の多かつた國際會議であつて、代表個人同志が胸襟を開いて語りあつただけでも大變に意義の深い催しで、世界の特に東南アジアの佛教徒の親和を深め、

報告である。

會議の終つた三十日の夕方から後樂園で代表歡迎國民大會が行われたあと、八時から上野精養軒で歡迎晚餐會が催された。出席者三百人にも及ぶ戦後最大の國際饗宴であるということであつた。晚餐會の始まるまでの暫くを、隣りのサロンで休んでいるとき、私はたまたま伊藤述史博士と隣り合せた椅子に坐つた。無論、博士とは個人的な面識はなかつた。今度の會議で、伊藤氏が總會の議長の一人として幾度か議長席に着き、名國代表からの様々の提案や發言を、手際よく處理されて、日本語と英語と兩方で巧妙に議事を進めてゆかれる手腕には感服していた。しかしジュネーヴの國際連盟事務局に二十何年も活躍せられ、戦時中は情報局總裁を勤めておられた氏が、どういう因縁で世界佛教徒會議の議長を勤められたのかについては、私は全く知らなかつたし、會議出席者の大部分が知りたがつていたところであつた。

「先生はどういう因縁で佛教におはいりになりましたか」と尋ねた。「私が佛教に入りましたのは妙な事からなのです。政治の方面からです。あなた方は信仰や研究の方面から佛教におはいりになつたのでしようが、私の政治からですよ」

そこで私は政治家の考えがちな、佛教を利用してアジアを統一して、ヨーロッパに對抗しようという意味かと思つて、尋ねてみた。「いや」と博士は強く否定して、「佛教によらなければ、いつまでたつても戦争はなくならない。世界のほんとの平和は佛教によるより以外に實現する道がない、という結論に達したのです。」と言われて、この結論に達するまでの道筋を話された。

「私はまだ佛教の信仰を持つてゐるところまでいきません

が、度々、宇井（伯壽）さんなど、研究會を開いて研究しています。私は三十年近くもヨーロッパに居て、西洋文化というものについて、裏の裏まで知りつくしているのです。そして長い間の見聞から言いますと、この西洋文化が附き纏う限り世界に戦争は絶えないと考えるのです。」

實に意外な言葉であつた。（實は當然の言葉というべきであらうが……）私のことを世間ではクリスチャンだと思つていますが、長い間あちらにいましたから、と言われる位、西洋文化の中に生活された人からの言葉としてはむしろ意外であつた。一口に言つて我の思想、有の思想に出發する西洋文化が、この我の充實と擴大を目指して、嫉視と反目と鬭争を續けているのは當然である。

「その結果、西洋文化に頼つていては戦争は防止できないと考えるようになりました。東洋には幸い佛教といういゝものがある。佛教の深い教理については、私はまだよく知りませんが、私の三年間の追放生活中に多少、研究して知り得たところによりますと、佛教の中心思想は、因縁所生ということでありましょう。この考えを西洋にも理解させるように充分に話してやつたら、世界平和の實現に一步步近づいてゆくと思います。佛教の思想は難しいが、これを西洋人にも解る言葉で説いてやるのがこれから必要なのです。」

因縁所生とは縁起である。全世界のもの一つとして因縁によつて出来ていないものはない。すべては相依り相助けて存在しているもので、たゞ獨り孤立してその存在性を持つてゐるものはない。無我である。であるから我を擯げるための貪りを捨て、反目や鬭争を止めて、互に助け合わなければならぬ——博士の、因縁所生ということか西洋人にもよく理解させるといふ言葉には、そういう意味が

包まれていることはいうまでもない。

「さき頃、東南アジアを一巡して、あちらの連中とも話し合つてきました。佛教によつて世界平和のために貢献しようということをする。パキスタン、インドネシア、ビルマ、タイなどどこも宗教的情熱の強い所です。パキスタンやインドネシアでは回教徒とも十分話し合つてきました。パキスタンのイクバルとかインドネシアのサリムとか、回教の指導者にも偉い人物がいて、いろいろ論じ合つた結果お互に提携する見通しがつきました。この所信を廣く徹底させるために、私は十一月から全國を遊説して歩くつもりです」博士の信念と實行とを知つて、深い感動を受ける者は私ばかりではあるまい。

終戦後アジアの諸國が獨立して、今まで植民地として押えられていたアジア諸國の東洋的な特色ある考え方が、政治においても外交においても次第にはつきり世界の表面に表れてきた。インドのパール判事の日本無罪論にしても、昨年の講和會議で行つたセイロン代表ジャヤワルデネ氏の演説にしても、駐日印度大使チェトウール氏が時々述べる意見にしても、一般の政治家や外交官とは違つたケタはずれの識見である。これからは一層こういう東洋本來の思想がはつきり現れるであらうし、現わさなくてはならない。

それにしてもわが國の政治家は今度の國際會議にどれだけのことをしただらうか。朝日新聞が「世界佛教徒會議の反省」として、三段抜きでトップ記事として取り上げたように、開會式には日本の大臣は一人も出席しなかつた。三笠宮が開會式から屋上午餐會まで出席して下さつたのに。閉會式には佛教信者の木村法相がたゞ一人出席した。いかに總選舉の直前とはいえ、政治家というものは恐いものであるという感じがした。

現代文學の佛教

ブックレビュー



折原教詮

明治の佛教文學は、淨土宗の碩徳福田行誠上人によつてその第一頁が開かれた。先づ最初に『法語筆話』はその跋文に

丁亥のとし二十年十月ばかり難波のまつうち寛篤翁の請に應じて花頂山の老法師筆をそむるときにとし八十二、なき後の形見にとて難波がたあしかる人もよき人も

ひとを撰ばぬ誓とぞきく

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

と誌してゐる如く、晩年知恩院門主となられた年の御作であつて、

勅修御傳第二十一卷に

いけらば念佛の功つもり、しなば淨土へまゐりなんととてもかくてもこの身には、思ひわづらふことぞなき。

御傳語灯録など申す御法語どもあまた集めたる御文どもあまたあれども、言葉みじかにして行者の今生往生の安心起行を述べつくし給へるは此れにまされるはあらじかし、まして今様の體裁なるぞはた珍しからずや。されば同行の人々の爲にいさゝか講説の詞を述ぶ。

といつて、安易平明な假名文を以て淨土信行の精髓を説き示されたものであり、佛教文學として第一義的なもの——平明な文學的表現によつて勸化教誡を旨とするもの——であつて、法然・親鸞の法語、日蓮の御書にも比すべく、法語文學集の棹尾を飾るものである。淨土入信の書として是非一讀を願ひたいものである。

他に『をみなへし』『剃髮のいはれ』『房總日記』『釋教百首』等の文學的作品を擧げることが出来るのである。『釋教百首』は

四十八願 (無量壽經)

其名こそ數はかそふれまことには

限しられぬちかひなるらむ

過二十萬億佛土二有世界一、名曰三極樂。

(阿彌陀經)

遠しとはとけともちかのしほがまの

烟はかりもたちはへたてす

の如く四季風物によせて經釋の義理を詠じたもので、選子内親王の『發心和歌集』寂然の『法門百首』以後、多くの祖師先徳によつて詠まれた釋教歌の最後に位置するものとして釋教和歌史上重要な位置を占めるものである。

以上『行誠上人全集』『國文東方佛教叢

『歌詠部、改造社版『現代日本文學全集』五二宗教文學編に收載されてゐる。

明治三十年代の中葉、新歌舞伎の興隆と相俟つて、文壇の大御所森鷗外によつて『歌舞伎』三十七年三月號(第四十七號)に附録として書き下され、翌四月上演された戯曲に、『日蓮聖人辻説法』がある。主題は日蓮上人傳中の人口膾炙してゐる一節、辻説法の場合であつて、さながら日蓮上人傳繪卷を展開したような作であり、當時高山樗牛によつて日本主義——日蓮主義が強く提唱された直後に上演されたものであつて、上人の波瀾萬丈の御生涯の中の一駒は、上田敏が「作中に現れた歴史の事實が從來のものと違つて正しい。」といひ、又「日蓮といふ人は如何に堅忍不拔の志を持つて居つて、勇往猛進する人であつたかといふ事を僅に上人が一代の逸事である辻説法に托して明かにしようと試みたものである」といひ、更に又「當時を偲ぶと共に并せて現代をも考へさせ『落ついた面白味』を感じさせるものである」と絶賛してゐるのをみても、この劇がすぐれた文學的な價值を持つた作品として當時の人達に如何に深い感銘を與へたかが窺へるとともに、新劇運動の基礎の一つとなつたものであることを并せ考へる

時、演劇史的にも忽せにすることの出来ない作品である。

他に日蓮の傳記を主題とした戯曲の中、注目すべきものに坪内逍遙の『法難』、及び大正十年田中智學師によつて書き下され、歌舞伎座にて上演された聖史劇『佐渡』がある。これは『報恩抄』はじめ多くの御書等の資料を參稽し、史實に忠實に、舞臺を鎌倉から佐渡へと移し、七幕十二場の大作であつて、先の『日蓮聖人辻説法』と共に、日蓮劇の雙玉ともいふべきものである。

鷗外・逍遙の作品は夫々の全集に、『佐渡』は前述『現代日本文學全集』に收められてゐる。

釋尊の御生涯、御事蹟を劇化した主な作品としては、第一に金子元臣氏の筆になれる、『悉達太子と耶輸陀羅妃』を擧げることが出来る。佛誕二千五百年を記念して、記念會の委嘱により創作され、上演されたもので、『摩耶經』の説話に主據し、作者の空想をも交へて、釋尊の本生譚として劇化したものであるが、科白が簡潔に過ぎ、構成が生硬な經典をそのまゝ利用してゐるため、極端に抽象化された釋尊になつてしまつてゐるのは戯曲の性質上止むを得まい。

同じ釋尊傳を主題としたものに倉田百三氏の『布施太子の入山』がある。これは布施太子——悉達太子が父母を捨て、王位を捨て、最愛の妻耶輸陀羅妃をも捨て、求道のために入山して行く人間釋尊の生々しい姿を、百三獨特の構想を以て潤花し、赤裸々に描き出されたものであり、先の『悉達太子と耶輸陀羅妃』と同じ釋尊傳を描きながら、全く對蹠的な作品となつてゐるのも興味深い。

前者は昭和九年十二月河出書房より單行本として發行されてをり、後者は岩波文庫本等によつて容易に一讀することが出来る。

大正中期以後、歐洲近代劇運動に刺戟され新劇運動が活氣を帯びてくるにつれ、どしどし新作が上演されるに到つた。

谷崎潤一郎氏の『法成寺物語』は、天才藝術家の定雲と、若き聖僧良圓に配するに美姬四の御方を以て主人公となし、戀と宗教と藝術との相尅する相を、彼の纖細な筆致を以て流麗に描き上げた力作で、あくまでも厚化粧を以て終始一貫してをり、『道成寺』を髣髴させるに足るものである。春秋座・築地小劇場で上演されたものであり、當時新潮社より『現代脚本叢書』第三編として出版されてゐる。

これと相前後して上演されたものに、大正十年三月春秋座で上演された倉田百三氏の、『俊寛』、及び大正十五年三月築地小劇場で上演された坪内逍遙の『役の行者』がある。

次に特に一言觸れておきたいのは、大正十年十月新潮社より單行本として出版された長田秀雄氏の『大佛開眼』である。且つて二千六百年を奉祝して、築地小劇場で上演され名聲を博したこともあり、又今度大映で本年度藝術祭参加作品として、映画化されるとのことである。

大佛造立の史實に則り、時代を天平十八年より、大佛開眼供養の行はれた天平勝寶四年迄とし、登場人物二十數名を數へ、五幕十二場を以て構成された大作であつて、大佛造立にまつはる政争・陰謀・闇闘・呪咀・戀・嫉妬、あらゆるものを織込んだ波瀾葛藤の大活劇を、造立を發願あらせられた聖武天皇の大精神を骨子として貫き、その構成に力を盡してゐる點こそ、最初から最後まで、息をもつかせず觀客・讀者をして緊張と感激の坩堝の中に追い込んでしまふ迫力を持つてゐる所以であると思ふ。

佛教文學の傑作としてのみならず、現代劇文學の白眉として仰がれてゐるものに倉田百

三氏の『出家とその弟子』がある。序曲附六幕十二場の長篇であつて、大正五年十二月、『生命の川』に發表され、以後岩波書店、『現代戯曲全集』（倉田百三篇）『日本戯曲全集』（現代篇）に收載された他、單行本として一時に百數十版を重ね、出版界を風靡したのであり、英・獨・佛・支その他に翻譯されてゐる。大正八年七月有樂座で、創作劇場の手で上演されて以來何回となく上演され、終戦後も二十三年十一月新橋演舞場で木實座によつて上演されてゐる。

親鸞を主人公とし『嘆異抄』の宗教的な慈悲と愛とを戯曲化したものであつて、宗教的な文學作品の中に、最も純粹なものである。わたしの淺ましき……わかりません……きめられません。

臨終の父の枕前でついに佛への歸依を肯んぜず、惱み續ける善鸞。

それでよいのぢや……善い、調和した世界ぢや。おゝ平和！もつとも遠い、もつとも内の。なむあみだぶつ。

きれぎれに説き教へる聖なる聲。親鸞の臨終をめぐりて、芳香靜かに漂ひ、かぐはしき調和の世界。大詰の一瞬！

「彌陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、

親鸞一人がためなりけり」と極重惡人の罪をもみづから一人で背負ひ、愚身の信心を悟り、惡人正機の門を開き、佛の限りなき愛と慈みとをととなへた親鸞も、たとひ門第一門の平和を維持せむためとはいへ、恩愛の絆は絶ち得べくもなく、老いていよいよ子を思ふ父の情。善鸞の心情をうつたへる愛弟子唯圓の切なる願も聞き入れてやりたい。逢ひたい、そしてたゞ一こと「許す」といつてやりたい

父は子を思ひ、子は父を慕ふ。

みづからの罪業の深さをみとどければみとどける程、罪の反省の眞摯なれば眞摯なる程、光明は明るく仰がれ、すくひを願ふの情いよいよ強く、廣大無邊なる彌陀の本願を信ずるところに、はじめて佛の慈愛と慈悲とはふりそぐのである。自ら犯した罪のために心身もくだけはてるまで苦しめ、惱め……。且つて己の通つて來た罪業の途を、今又いたみきづきながら、たどたどしい足どりで歩み續けてゐる善鸞のために、佛の愛と慈悲とを願つて、一心に彌陀を念ずるのである。

子故に迷ふか弱い親心に、峻嚴なる法の鞭をあて、人間親鸞の到達し得たこの強い愛の世界こそ、慈悲にみちみちた光明の世界であり、『嘆異抄』に示された佛の世界である。(續)

吉水 (五)



東山未知夫

春の嵐

「何者ぞ！ 名乗れ！ 名乗れ！」

時國の郎從の聲を聞かばこそ、物具に身を固めた一團が、無氣味な沈黙の殺氣をはらんで、大浪の如く時國の館の中へなだれ込んだ。

「卑怯ぞ！ 名をなれ！」

度を失つて、かん高い叫び聲を擧げる時國の郎從達へは、無言の刀箭が集中される。全然聲を出さない相手ほどしまつの悪いものはない。こちらが聲を出せば、それが相手の攻撃目標となる。こちら側

が聲を出して、相手に目標の所在を示してやるようなものである。寝すんでいた時國公が郎從の叫び聲にはつと目を覺ました時は、攻め寄せた無言の集團の一部が、颯つと雨戸を蹴破つて屋内へと踏み込むのと殆んど同時だった。

だゝゝゝつ！

踏み込んだ一團が、再び屋外へ押し出されて來た。

手強いぞ！！

彼等は期せずして心の中で同時に叫んだようである。時國公の家中で四天王と言われる面々とぶつつかつたのだからたまらない。逆浪を喰つたようにどゝゝゝつ！ と庭前へ押し出されて了つた。

「いずこの盜賊ばらなるぞ。門違いすな。こゝは漆の時國公が館なるぞ。」

「歸れ、く。」

「寄手の頭領は誰ぞ。名乗れい。」

「屁のような奴等よ。正體を言へ。」

縁ぶちに仁王立ちに突つ立つた四人の四天王の姿は、折からの十三夜の月に照らされて、正さに繪に畫いたようなすばらしい四天王ぶりである。そこへふりかゝる落花の片々、演技の効果は満點である。

しかし、誰か知らん、この効果が彼等四天王にとって致命的な作用をもたらそうとは。暗い屋内を背にした縁際にあつて、十三夜の

月光に浮出された彼等四天王は、攻撃軍にとつては絶好の目標となつたのである。

四天王の問いに對して、攻撃軍は沈黙を以て答えた。重苦しいまでの沈黙である。いつまで續く沈黙ぞ、もう沈黙の壓力は飽和點に達している。何等かの形で爆發の緒を見出さなければ、この場はもう耐えられなくなつていた。

と、突序、沈黙を破つて激しい弦鳴の音がしたと思うと、無數の矢の雨が目にも見えないような速さで、四天王めがけてそそがれたのである。

「卑怯なり。」

四天王達は虚をつかれた。近頃流行の盜賊の一團が、家を間違えて襲撃して來たのだ、と彼等は思つていた。農民の一揆にしては統制がとれ過ぎている。着けている物具も、持つてゐる武器も身につけていて、一應體裁は出來ている。これはきつと盜賊商賣の連中に違いないと四天王達は見てとつたのである。そして連中が無言であつたのは、彼等が家を間違えて襲撃した失敗にきまり悪くなり、退却するのに躊躇しているのだと解釋したのである。しかるに、この豫想が美事くつがえされたのである。

彼等四天王は、いわゆる仁王立ちになつて見得を切つていた所である。そして落花ひらひら。効果満點という所で、逆に矢の雨を受けた譯である。

だから、いかな四天王と雖も何條たまるべき、彼等は精神的にも肉體的にも致命的な痛手を負つたのである。

定明は、この機會を決して見逃しはしなかつた。彼は庭にあつて手ぶりで「それつ」と突入を下知した。攻撃軍は又もや一團となつて縁に跳び上り、屋内に踏み込んだ。

四天王達は、深傷を負つたといいえ、さすがは豪の者である。入り替り立ち替り掛つてくる連中を斬つて、斬つて、斬りまくつた。しかし四天王たちの力にも限度がある。彼等の疲勞も目に見えて來た。その上彼等は素肌に着物のまゝである。これに對して寄手は鎧兜、腹巻等々の物具を着けている。そして後から後からと新手が加わつてくる。四天王達は各々、斬り死を覺悟した。そして彼等は時國公の身を氣ずかひつつ、彼等の生命の燃えきるまで、阿修羅の如く戦いつづけて死んで行つたのである。

寄手は時國一人を目指していた。しかし時國の家中の人々は、自から防壁となつて、誰一人として寄手の者を時國のもとへ近ずけなかつた。だが、四天王が倒れた今となつては、もう寄手が時國へと突き進んで行くことを防ぐでだてもなかつたのである。

攻撃軍は一團となつて時國公の寢所へと殺到した。

時國公は、自分の寢所の枕元に端坐したまゝでいた。じつと目をしてしながら、今までの経過を反芻していたのである。大體、今夜の夜討の事情も判つて來たようである。



「定明の私怨のなせるわざぞ」

時國公は内心でつぶやいた。あゝ恐ろしいものは人の怨み。個人的な私の怨みが、かくも多くの貴い生命を失つたことよ。

石の如くじいつとして、時國公は端坐したまゝでいる。

「このまゝ討たれようか？」

もう肚を決めていた。そのとき一團の寄手が土足のまゝ物をも言わずに斬り込んで来た。預所の勢ならば、弓矢取る者の禮儀は知つてゐる筈。名乗りもせず、下輩ばらが土足で斬込むとは餘りにも狼籍の沙汰。時國公の心中には、むら／＼と幽霊の炎が燃え上つた。

「すさまじぞ、ひかえよ。」

一瞬、斬込んだ連中はびりりと雷電に撃たれた如くたじ／＼となつて立ちすくんだ。目に見えない威嚴の波が時國公から放射される。寄手は瞬間ひるんだが、餘勢を驅つて遮二無二に、時國公の聲を目掛けてどつと双を振り下したのである。

このとき、勢至丸は母と抱き合つて納戸の隙から庭を見ていた。

折からの十三夜の月光を受けて、庭の中央に立つている頭領株の男がある。甲冑の前の鍬型の金具が時々無氣味に月光に反射する。思ひなしかじつと此方を見ているようである。勢至丸は父から與えられた小弓に無意識に矢をつがえていた。庭の男も矢を弓につがえた。

「いけない！ 父上があぶない！」

と思つたのと同時である。勢至丸の小弓から矢が飛んだ。手答えあり！ 矢は件の男の甲冑の庇をすつて、眉間につき立つたようである。その男はあわてて、つがえていた矢を落し、右手で眉間の矢を抜こうとしているらしい。

折も折、館の近邊の農民達がこの騒ぎに目を覺して、集り出したのである。呼集の鉦の音も聞こえる。

「時國さまの館があぶない。」

「館へ！ 館へ！ 時國さまのために！」

農民達の叫び聲がだんだん判つきりして来る。

襲撃軍は途端に、周章て出した。先ず頭領の男が眉間を血の噴水にして逃げだした。一たび逃げ腰なれば何條たまるべき。襲撃軍はくもの子を散らした如く逃げ去つて了つた。

「時國さまあ！」

農民達の聲が段々と近くなってくる。皆な時國公の平生の慈恵にこたえる時は今ぞと、息込んで時國公の館目がけて駆けつけてくるのだ。

どつと農民達一同が館の内へ駆け込んだときは、邸内は死んだような静寂の氣に沈みかえつていた。

家屋の奥の方、時國公の臥所のあたりに、かすかな紙燭の火がゆらめいている。深傷を負つた時國公を支えて左右から勢至丸と奥方が身近く寄添つてゐる。あたりには家中の人々の死骸が奮戦の跡を

物語るかのように横わつてゐる。

「おゝ、おいたわしい！」

農民達は庭前に肅然として立ち止つたまゝである。

遅かつた。すべてがもう既に行われて了つた後の祭りだつた。農民達の間からは、其所此所に期せずしてすゝり泣きが起つた。中には堰を切つたように、手放して大聲を擧げて泣き叫ぶ若者もあつた。

折からの十三夜の月も、思ひなしか悲しそうな光を邸内にそそいでゐる。靜かに又、一ひら、二ひら、櫻の花が散りかゝる。(つづく)

淨 土 十二月號

十一月二十五日發行

冬 來 る

名士 佛教展望

訪問 除夜の鐘によせて

「法然上人」を放送して

阿彌陀經の話

吉 水

北海道最初の念佛行人

有 難 い……

忍徴上人のこと

大佛千二百年祭

吉田絃二郎

長井眞琴

大橋俊雄

村田嘉久子

藤井實應

東山未知夫

須藤隆仙

中野尅子

大橋智譽史

小島章見

芝園だより

◎ ものを生み出す、作り出すということは、苦しいことだが、また楽しいこともある。数カ月かかつて、庫裡一つ、幼稚園一つを増築して、さて、客が来て、ほめてくれるのをきくと、苦しみも楽しみとなる。お百姓が日々、ものを作り出して行くことは、だから尊いのだ。私事にわたつて恐縮。

◎ 若いスタッフが加わつて下されて、私もどうやら仲繼者として一應の役目が終りかけて来た。むろん、今後共縁は切れぬが、何としても、時の流れの前には、萬物は流轉せねばならぬ。安居、大橋、齋藤の三君の出現である。

◎ ところで、此若い面々、仲々にちつとしておらず、龍海君は宗教學會、印度佛教學會に、安居君は中國學會に、齋藤君は宗教文化學會に、大橋君は宗學大會に、それぞれうんちくを傾けての活躍。仲々以つてハデなことである。

る。(竹中)

○ 淨土への好評は、編者への御世辭と許り思はぬが、もう少し雑誌らしいものに育てたい。下手なジャーナル化も困るが、ぼち／＼その方向へ進めますから、御希待下さい。

○ 「現代短歌」「大佛開眼」はその一つで、將來趣味の欄をあらゆる角度から取りあげます。歌壇も設けたいものです。誌友の投稿を願います。同人には「心の花」「創作」の有力者が協力下さることになりました。

○ 思はぬ所に誌友が居て一驚、柏崎の小林知行氏(眞言宗)もその一人。出張で上京、復刊以來の讀者とか。大正高出身の三戸部氏もその一人。願行寺の集ひに缺かさず行かれる妙好人である。

○ 漸く愛着を覺へて芝通い。龍海坊に日參の形。彼の二世は親の生き寫し。今に淨土も編輯する事でせうが、若い世代の熱烈な支援がもつと欲しいもの。どん／＼投稿

願います。(安居)

○ ぼつねんと編輯現場に孤軍奮闘、ピンチを切抜け／＼やつて来たが、秋とともに、どつと新手が入れかわり立ちかわり編輯室にやつて来て、プランをねり、ビジネスをさばいて行く。

○ 折原氏のブックレビューを讀書の秋に送る、氏は、正大國文學の新進。

○ 本號は京都佛大龍大教授の小笠原先生のユニークな味のある玉稿が頂けた。會員、大津の石島俊徳氏の御厚配による。誌上御禮申上げます。皆様もどうかよき原稿を御世話下さい。

○ 世界佛教徒會議に上京の高橋良和氏、編集室を訪れ、編輯子に力強い批判と助言。京の話も色々。エネルギーシユな活動と鋭いセンスが年とともに光つてゐる。

○ 内山憲尙氏は教育委員に推されて立候補され、惜しい所で次點とはいへ、人柄を語る好成绩。

○ ペンネーム東山未知夫氏でおな

じみの西川知雄氏、去る十七日、倫理學會發表のため上京、訪問、歡談。法然傳の難しさを語り合ふ

○ 淨土の集ひルボのような會員記事はどん／＼編集部宛お流し下さい。

○ 宗學大會は十日廿五、六日盛大に行われた、詳報は次號に、(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(ト共)。毎號定價三十圓(ト四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿七年十月廿五日印刷
昭和廿七年十一月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇

振替東京八二一八七番
電・芝(四三)一三二八

生活と文化を結ぶ

松坂屋



本社 名古屋市中區南大津通り

☆各店所在地☆

東京(上野・銀座)

静岡・名古屋・大阪

國漢書籍の御用命

何なりとも承ります

御入用の向は御照會下さい

松雲堂書店

東京都千代田區神田神保町三ノ一
振替東京一一〇四八九番

浄土編輯部編

浄土
トラクト

信徒必携

B六、十六頁
價十圓送八圓

○目次一、ほとけさま(阿彌陀佛・觀音勢至・極樂淨土)二、みおしえ(法然上人・三部經・念佛・往生)三、おつとめ(佛壇・珠數・木魚・けさ・法衣・合掌禮拜・十念・燒香・墓參)信徒のことは●五十部以上一割引、百部以上二割引

○發刊以來、施本、浄土の集ひ、等の講話テキストとして、手頃のものだと好評絶讃です
○浄土の教を知るのに、これほど要を得て簡なるものは、今までにありません、各信徒一本をお備へ下さい

法然上人鑽仰會